

「万葉集」の中国語訳について（そのⅠ）

—— 銭 稻孫訳を考える ——

松 岡 香

一、はじめに

『万葉集』と中国との関係について考察する論文の殆んどは、「中国文学が『万葉集』に与えた影響」、即ち、「中国から日本へ」の流れに関するものである。確かに、「万葉集」には中国文学の影響が多くみられる。大化の改新以後、特に奈良朝の日本は、先進国中国の文化をとり入れることに並々ならぬ熱意をみせた。詩歌に関して言えば、「詩経」や「楚辞」、「文選」などが、自国の文学のように親しまれ、愛されたのである。その結果、人麻呂においてはその歌の対句の措辞、歌群の構成など表現面のみならず、その発想の面においても中国詩人の影響をうけているといわれ、更に「顕在化するのは大伴旅人、山上憶良などの作歌においてである」⁽²⁾とされるほど、中国文学は万葉歌人に浸透することになった。⁽¹⁾中国から日本へ⁽³⁾の流れは、きわめて太いパイプであったと言えるよう。

では、逆の流れ、つまり「日本から中国へ」という流れを考えてみたい。中国の人々は、「万葉集」をどのように受けとめているのであろうか——。この点について考えることは、些か困難である。「万葉集」を含む我が国古典文学の中国語訳が、中国文学の和訳に比して余りにも少ないからだ。吉川幸次郎氏は、この不均衡を「中国人

は外国文明というものにあまり興味を持たない、あるいは持てない」と説明し、更にそれは自国の文明に対する自信が非常に強いせいである、と分析している。⁽³⁾「万葉集」についてみるなら、漢訳の試みは謝六逸、周作人、傅冲濤、銭稻孫氏らによってなされているが、いずれも選訳であり（傅冲濤氏は二首のみ）、四千五百首という歌数に比してその訳歌数は非常に少ない。従って、「万葉集」の全てにわたって考えることは不可能であるが、筆者はここで選訳の中から特徴のある銭稻孫氏の漢訳を取り上げ、中国人のとらえた「万葉集」について考察を加えたい。

二、銭稻孫訳の特徴について

特徴の第一にあげられるのは、その訳歌数の多さである。銭氏は「万葉集」の選訳を二度試みている。最初の選訳は、一九三七年九月「北平近代科學圖書館刊」創刊号に「日本古典詮譯二首」と題して、雄略、舒明両天皇の御製歌が掲載された頃に始められ、後に四十首が一九四一年「日本詩歌選」として、他の古典の漢訳と共に発表された。そして、一九五六年には日本学術振興会から「漢譯萬葉選」と題した二度目の選訳が発行された。これは、佐々木信綱氏に

依頼された錢氏が、鈴木虎雄氏、吉川幸次郎氏らの協力を得て翻訳したもので、卷(一)三五首、卷(二)二三首、卷(三)三五首、卷(四)七首、卷(五)九首、卷(六)一五首、卷(七)一一首、卷(八)一一首、卷(九)九首、卷(十)二首、卷(十一)二首、卷(十二)二首、卷(十三)三首、卷(十四)八首、卷(十五)一三首、卷(十六)一五首、卷(十七)一九首、卷(十八)一四首、卷(十九)二六首、卷(二十)二一首と各卷にわたり、計三百首が訳されている。この数は「万葉集」の総歌数からみればごく一部ではあるが、他の選訳に比べれば圧倒的に多い。訳歌数の面では、最も普遍的、本格的な訳であると言える。

ところで、錢氏の訳のもう一つの特徴は、その翻訳の方法にある。翻訳とは、ある国の言語を他の言語に移しかえる作業のことで、近藤春雄氏は「かかる置き換えは、その置き換えられたものが初めと全く同質同量のものであつて變更してはならないといふ點、即ち原作に盛られてある思想と感情を、それ以上でもなく、それ以下でもなく、等量に移し替へねばならぬといふ點に於て幾多の困難を伴ひ、殊に韻文に於てその極に達する」と、その難しさを指摘している。確かに、個々の国の言葉の持つ美しさを、時と所を移し替えてなお保ち続ける——「等量に移し替へる」——ことは不可能に近い。そこで、翻訳者は大意を説明する「説明訳」か、多少瞬目でもイメージ伝達に主眼を置く「イメージ訳」かの選択を迫られることになる。⁽⁵⁾

謝六逸、周作人氏らは「説明訳」の立場をとった。これは、内容的には正確な伝達であつたが、韻文を散文に置き換えたことにより原歌の美しさが損なわれ、「同質」とは言えない結果になった。

これに対し、錢氏は後者の「イメージ訳」を選択した。氏は「漢譯萬葉集選」の序文で「爰不自揣、亡試韻譯。以擬古之句調、庶見原文之時代與風格、然而初未能切合也」と述べ、詩歌の持つ韻律を大切にしようという姿勢を示した。その立場に基き、氏は「万葉集」

の原歌を一度解体し、再び組み立てるときに自国の詩集「詩經」の形に置き換えて翻訳したのである。この、外国の韻文を自国の韻文のリズムに置き換えて表現するという手法は、上田敏訳「海潮音」などで我々にもなじみが深い。勿論この場合も、原歌と訳されたものとが「同質」であるとは言い切れない。しかし、原歌の韻文としての性質は生きるし、イメージの広がりやの伝達もある程度可能になるのではないだろうか。

以上二つの点において、錢稻孫氏の訳した「万葉集」、特に「漢譯萬葉集選」は他の選訳とは大きく異っている。「漢譯萬葉集選」は、その量においても質においても画期的な訳であると言つてよい。「万葉集」は錢氏によつて初めて本格的に中国に紹介されたのである。

三、訳者について

外国文学の翻訳を手がけるためには、その国についての深い理解が必要である。ここでは、錢稻孫氏がどのような経歴の持ち主であるか、どのような形で日本と関わったのかということを見ていきたい。⁽⁷⁾

錢稻孫氏は一八八七年、浙江省興に生まれた。六朝の詩人鮑照の詩と、唐の李商隱の駢文の注を書いた錢振倫を祖父とし、『史目表』その他の著述のある錢恂を父とし、音韻学の大家錢玄同を叔父とする。母堂もまたその国文学に深く、清朝の閨秀詩人についての著述がある。⁽⁸⁾

父が外交官であり、清朝政府から留日学生監督として日本に派遣されたため、氏は幼時から日本に移り住んだ。そして、慶応幼稚舎から普通部、東京高等師範付属中学、成城学園と、一貫して日本の教育を受けている。ために、氏の日本語は、日本人としか思えない

「万葉集」の中国語訳について（そのⅠ）

ほどであつたらしい。⁽⁹⁾

その後、父がイタリア及びベルギーの公使に任ぜられたことにより渡欧、ローマ大学に学んだ。ここに至って、錢氏はその中に、母国中国・日本・西欧の三つの世界を合わせ持ったのである。

帰国後の氏は、その学識を生かして母国の教育に貢献することになる。北京政府教育部主事、視学、僉事、国立北京大学東方文学系講師を経、清華大学で日本文学を教えた（一九二七年以降）。そうして、一九三九年には復古した北京大学の本部秘書長となり、「昭和十七年（一九四二年）のころ、ちよつと北京に行ったが、そのおり、チェン氏は北京大学の総長になっていた」と、教育界に広く知られる存在となった。しかし、この頃は氏にとつて辛い時代であつたらしい。日本文学を専攻した親日家だったため、抗日運動家からは毎日のように脅迫状が舞い込み、他方日本文化人からは「チェンダオソンをたおさねば、北京大学は日本のものにならぬ」と攻撃されるなど、日中の板ばさみとなつて苦悩したようである。⁽¹⁰⁾戦後、戦犯扱いを受けたこともあつたらしいが、残念ながら詳細はつかめない。ただ、ひきつづき北京大学で日本文学を教えるかたわら、日本の古典文学翻訳に従事したことがわかるだけである。

錢氏が翻訳した日本文学は、「万葉集」のみにとどまらない。「万葉集」以外の韻文では「古今集」「新古今集」「謡曲隈田川」から俳句、現代短歌までを手がけているし、散文の分野においても「源氏物語」や「伊勢物語」などの作品の抄訳を試みている。また、一九三〇年以来、自宅（北京）に「泉壽東文書藏」と名づけた図書館を設け、日本の書物の蒐集に努めた他、日本の文化についての講演を積極的行なうなど、中国人に日本を紹介した氏の功績は大きい。これらは、前述の氏の生い立ちにも負うものである。氏においては、そ

の日本滞在が長期にわたり、しかも幼少の頃から青年期までを日本で過ごしたということが、日本文学を翻訳する上での強みとなっている。学校教育の出発点を日本で迎えた錢氏にとっては、先入観も抵抗もなく日本文学を受けとめることの方が、むしろ自然だったのではない。であるからこそ、魯迅ほどの知日家にも時おりみられるややぎこちない日本語表現が、氏の場合には殆んどみあたらないのである。氏は、日本文学を翻訳する、うってつけの人材であつたといえよう。

四、「漢譯萬葉集選」研究

(一)「漢譯萬葉集選」と「日本詩歌選」

先に述べたように、「漢譯萬葉集選」には三百首の歌が載せられているが、そのうちの三六首は、「日本詩歌選」発表に際して一度翻訳したものを再び検討し、訳し直したものである。ここでは、まずその三六首の中から主なものを取り上げ、新旧二通りの中国語訳を比較してみたい。

天皇御製歌（卷一一）

A 「日本詩歌選」による

有女陟岡	携圭及筐
以彼圭居	采菜未遑
之子焉居	我欲得詳
曷示我氏	母使我徬徨
天監茲大和	悉我宅京
無或不秉我承	維以我為兄
亦昭我氏名	

岡筐遑詳徨……平声陽韻

京兄名 ……平声庚韻
B (「漢譯萬葉集選」による)

筐兮明筐 携在旁

圭兮利圭 執在掌

之妹者子 採菜在岡

家其焉居 曷昭爾名

天監茲大和

率維我所居 率維我所坐

我斯則告兮 我名亦我家兮

筐旁岡……平声陽韻

C (原歌)⁽¹²⁾

籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岳に 菜摘ます

兒 家聞かな 告らさね そらみつ 大和の國は おしなべて

われこそ居れ しきなべて われこそ座せ われにこそは 告ら

め 家をも名をも

これは、「万葉集」冒頭の雄略天皇作と伝えられる雑歌である。原歌は和歌として定型のものではないが、素朴な中にも独特なリズムの美しさを持っている。例えば、冒頭の四句は、三音四音五音六音と徐々に大きく広がっていく点で音楽のクレッシェンドに似た効果を感じさせるし、対句表現を多用し繰り返すことで、歌全体に大らかな調子の良さが漂っている。またその内容も、春の野で若菜を摘む娘に求婚するという、のどかで牧歌的なものである。柿本人麻呂は、大和を「言挙げせぬ國」と定義づけた。確かに、言霊信仰の盛んな古代社会にあつては多弁は厭われるものであり、名前なども滅多に明かすものではないとされた。名を「告る」というのは、公式にものを言うほどのことにあたり、特に「女が男に自分の名をあか

すのは、結婚をうべなうしるし⁽¹³⁾」であつたという。原歌にみえる天皇は、堂々と娘に名を問うことにより、若々しい支配者の悪びれない権力誇示の姿を示している。以上の点に留意しながら、AB二つの訳をみていきたい。

まず、一読して気が付くのは、末の部分に関しての原歌との解釈の違いである。原歌の一五句一六句は、古くからさまざまな読み方がなされてきた。「われにこそは のらめ」「われこそは のらめ」或いは「われこそはのらじ」等々、定説がない。錢氏の訳は、その中で一般的な「われこそは のらめ」と読む説に基いており、これはAB共に言えることである。そして、B訳に付けられた補促の部分で、氏は以下のように述べている。「末二句、原文有異讀。或讀為以兄稱我、則告以家與名。或讀為我則不爾告、亦家亦名。兄者夫稱、謂妻為妹也。讀為不告、言無庸告也。要皆見其誂、而不若是讀、誂意已具見、今從古讀譯。」一五句目を「われこそは」ととることにについて特にこだわりはないが、一六句目を否定と読むか肯定と読むかに迷つたらしい。そして誂意はこの部分だけではなく全体にあらわれているのだから、特にここを否定ととって誂意を意識しなくても良いという解釈を示している。

また、名を「告る」ということの意味について、氏は「女子尤不輕以名告人。問名即示好述之志」とB訳の補促に述べている。この「好述」という言葉は、「詩經國風」にみられる。即ち、「周南『關雎』」中「窈窕淑女 君子好述」とあるのがそれで、「良き配偶者」という意味の言葉である。

なお、両訳共通に出てくる「天監茲大和」という表現であるが、これは原歌の「そらみつ 大和の國は」の部分にあたる。「そらみつ」は「大和」にかかる枕詞だが、饒速日命が天の磐船に乗って大陸を

「万葉集」の中国語訳について（そのⅠ）

駆けつけた折り、国を空から見下したことにより空見つ大和と呼ぶようになったという説がある。⁽¹⁴⁾漢訳の「天監」は、その伝説をも踏まえた表現で、このような所にも、氏の日本文学の理解の深さを感じさせる。

では、二つの訳を個別に考えてゆきたい。A訳は四字句中心で押韻が整い、全体に整然とした雰囲気がかがわれる。翻訳の仕方は、大意に自己の解釈を加味し、それを新に中国詩の形で表現するという、かなり大胆な手法を用いている。最初に「有女陟岡」と述べて場面の設定をしたり、或いは「母使我徬徨」や「維以我為兄」などという、原歌にはない表現を付け加えたりしているのが、それである。四言を主とし、古朴な調子を出す工夫はみられるが、この訳からは原歌の口誦性が失われ、「大和ののどやかな平野に演ぜられた、オペラにもせまほしき歌の場面」⁽¹⁵⁾が、やや理づめなものに変化している。

これに対し、B訳はそういった面にも細かい配慮がなされている。一読して目につくのは、音調を整える助辞「兮」であるが、この響きは、原歌の歌謡性、口誦性をうまく伝えて効果的である。「兮」の使用により、なだらかな原歌（日本語）の調子が幾分感じとられるようである。更に、翻訳にも対句を多用し、原歌の雰囲気を実にうつしとりたいとする氏の姿勢を示している。日本語の美称「み」については、「明筐」「利圭」と表現され、工夫がかがわれる。

全体として、B訳の方がやわらかい印象を与える。原歌の呼びかけの調子などを考えれば、B訳の方が適当であるように思う。

輕皇子宿于安騎野時

柿本朝臣人麿作歌（卷一―四八）

A（「日本詩歌選」による）

流景灼東岡 廻首月已傾
〔漢譯萬葉集選〕による）

暖暖東方曙色遙 初開宿霧覆葦蒼
回首西流星漢澹 残月在天懸未消

遙蒼消……平声蕭韻

C（原歌）

東の 野に炎の 立つ見えて かへり見すれば 月傾きぬ

この歌は、亡き草壁皇子を追慕する長歌のあとに付けられた四首の反歌のうちの三首目にあたる歌である。長歌の歌いおさめの抒情から、さらにのちの抒情へと、時間的空間的な広がりをもって歌い継がれていく反歌のあり方は、人麻呂のあたらしく開拓した作法であり、⁽¹⁶⁾四首は長歌以後の時間の流れに沿って歌われている。従って、これらは一連の繋がりをもった作品であり、切り離して考えない方が良のかもしれない。事実「漢譯萬葉集選」は、これらを全て翻訳することで繋がりを意識する姿勢をみせている。しかし「日本詩歌選」には、この三首目の反歌のみが載せられているので、ここではあえてこの歌だけを取り上げて考えてみることにする。

まず、A訳には一箇所不可解な点がある。冒頭「流景」の語がそれで、本来この語は「落日の景色」または「夕日」を指す語である。⁽¹⁷⁾「漢語林」には「流れ来る（照り輝く）日光」の意も見えるが、中国古典においては「落日の景色」と解釈するのが一般的である。その語を、暁方の情景に用いることには些かの疑問を感じる。この表現から、まだ明けやらぬ荒野の蒼い広がり、雄大というよりは凄愴な情景を想像するのは難しいのではないか。A訳は原歌を素直に置き換えようとしながら、やや平板な印象を与えている。

そこでB訳であるが、これは前の雄略天皇の御製歌のときとは対

照的に、原歌に自己の解釈を加味した訳となっている。二句目三句目の「初開宿霧覆葦苳 回首西流星漢澹」という表現がそれで、原歌にはないものを新しく盛り込むことにより、叙景歌としての美しさを強調しようとしているように思われる。しかし、そこから生まれるイメージは、原歌の世界とは些か異ってくるのではないだろうか。

原歌と訳歌とのイメージの差は、四句目に至って一層顕著にあらわれる。即ち「月傾きぬ」を錢氏は「残月在天懸未消」と置き換えているが、「月が傾く」と「月が消えないで残る」とでは、受ける印象が違ってくる。多分、この解釈の差は、この歌を単なる叙景とするか、或いは底に別の想いをこめているとみるかによって生じてくるのであろう。錢氏は、この一首を雄大な叙景歌ととらえたのかもしれない。しかし、単なる叙景歌とのみとらえて良いものであろうか。

この歌の舞台となった安騎野は、不遇の皇子であった日並皇子（草壁皇子）が、生前好んで遊獵した土地であり、錢氏が「天武時草壁在東宮、嘗獵于安騎野、作者侍從」と補促しているように、人麻呂も随行の経験があったらしい。その、思い出の安騎野の地に今、草壁皇子の皇子である軽皇子が遊獵に來たのである。人麻呂をはじめとして居並ぶ人々の胸には、ひとかたならぬ感慨が浮かんだことであろう。そんな中で作られたのが、これら一連の歌であった。そこには、当然のことながら挽歌的抒情が漂う。筆者は、かつて尾形仇氏の講義の中で、「かぎろひ」は、これから未来に向かって歩き出そうとする軽皇子を、「月」は、今は亡い草壁皇子、または草壁皇子の追憶を、それぞれ象徴する」と教えられた記憶がある。であるならば「かたぶく」という言葉のイメージの広がりや「未消」と

変えるべきではない。こうしてみていくと、錢氏の訳は、叙景は確かに美しいが、底を流れる静かな鎮魂の調べには欠けているように思われる。

柿本朝臣人麻呂從石見國

別妻上來時歌（卷二―一三三）

A 「日本詩歌選」による）

竹蕭蕭兮深山 悲別離兮思獨煩

B 「漢譯萬葉集選」による）

篠叢深兮山中 葉有聲兮清沖

別吾妹兮行來 我思念兮惺忪

中沖忪……平声東韻

C （原歌）

小竹の葉は み山もさやに 亂るとも われは妹思ふ

別れ來ぬれば

この歌も前の歌と同様、長歌と二首の反歌とで構成される連作中の一首である。これらは、国政報告のため妻と別れて単身石見の国から上京の途についた人麻呂が、その途次に石見に残してきた妻を思つて詠んだものである。石見は現在の島根県の一地方にあたり、人麻呂はその国府の属官であつたと、錢氏もBの訳の後に付け加えて述べている。なお、歌中に「妻」とあるのは、現地でめとつた妻を指す。当時、地方官が現地妻を持つのは普通のことであつた。人麻呂の場合、その妻は新婚間もない妻であつたらしいから、別離がひととき痛切な悲しみを伴つて迫つたようである。

そんな人麻呂の心情がよくあらわれているのが、「亂るとも」という表現であらう。「古典文學大系」には、「トモは既定の事実を仮定的に表現する語法にも用いる。その際は下が否定・推量など不確実な

「万葉集」の中国語訳について（そのⅠ）

陳述を表わすのが例である。ここでは『我は乱れず』が略されている⁽²¹⁾とある。小竹の葉は風に乱れているが、私の心は乱れることなく、ひたすら妻を思う、の意というわけである。また、斎藤茂吉はこの部分を「さやげども」と読み、『ども』には、それだけで強い感動が籠って居る⁽²²⁾と、歌人らしい解釈を示した。この部分を、銭氏はどのようにとらえているのであろうか。

A訳B訳共に、否定的なとらえ方はなされていない。特に、B訳では「我思念兮惺忪」つまり、「私の思いも（風にさやぐ小竹の葉のように）湧き起り定まらない」というように表現されている。そして、「篠」という言葉に換えた「小竹」については、「讀音沙沙、今通作笹字、日本所作。（中略）其高不盈尺、而葉潤」と説明している。丈が低く葉が大きいといえは熊笹であろう。西郷信綱氏によれば、熊笹の乱れ騒ぐ音は「一種ぞつとするような、寂しく乾いた音⁽²³⁾」であるらしい。笹の葉の不安な動きに作者の心の乱れを想起した銭氏の心情は分からぬでもないが、ここはやはり、共に揺れるのではなく、「動」の中にあつて一筋に妻を思う「静」の解釈——否定の接続——が欲しかったところである。

A訳については、「蕭蕭」という形容が、訳全体にも寂しい雰囲気を与えている。「悲」という言葉を直截に用いたため、やや印象が限定されたが、一首の心情はB訳よりも表現されているように思う。

太宰帥大伴卿讚酒歌十三首

(卷三—三三八—三五〇)

A 「日本詩歌選」による)

空愁奚為者 濁酒且一杯。
昔以聖諡酒 大聖言何鼓
古者七賢人 所欲亦佳醕。

B

〔漢譯萬葉集選〕による)

利口不如飲 何妨醉而啼
云為迷所以 惟知酒至瓌
良羨常酒浸 恨不身為疊
親彼不肯飲 醜比沐猴悲
縱云無價寶 孰與卮酒齋
縱云夜光珠 孰若飲遣懷
遊事無可貴 寧還啼醉歸
今生但得樂 蟲鳥甘輪迴
生者必有死 在世何不悵
默坐若為良 豈如醉歔歔
杯醕瓌疊廻……平声灰韻

- (1) 憂思良無益 何如忘諸懷
忘憂惟濁酒 似宜飲一杯
- (2) 伊昔大聖人 以酒名佳釀
諒哉斯言也 信云得其當
- (3) 古之七賢人 放曠百無欲
百無蓋有一 所欲惟美醕
- (4) 出口期聖賢 欲醕……入声沃韻
酒醉至涕泣 莫若且飲酒
勝如言之醕
- (5) 莫知所以稱 莫知所以措
物之至可貴 其在酒一注
酒醕……上声有韻

措注……去声遇韻

- (6) 乘生徒為人 不若作酒樽
酒樽常親酒 此身有餘芬
- (7) 嗚呼醜矣哉 自詡賢者然
有酒不肯飲 覩之有如猿
- (8) 寶縱云無價 無價于何有
奚如一杯酒 孰還勝視酒
- (9) 縱云夜光珠 珠亦何有於
孰如飲杯酒 開懷且自娛
有酒……上声有韻
於娛……平声虞韻
- (10) 人生歡樂道 其道不一足
中惟一道高 道在醉酒哭
- (11) 但得今生樂 來生復何校
即或生為蟲 抑或生為鳥
- (12) 生者必有死 凡物無參差
人生在世間 不樂又奚為
差為……平声支韻
- (13) 默坐謹言笑 若為賢者然
不如飲復飲 醉至涕漣漣
然漣……平声先韻

C (原歌)

- (1) 驗なき 物を思はずは 一坏の 濁れる酒を 飲むべくあ
るらし
- (2) 酒の名を 聖と負せし 古の 大き聖の 言のよろしき
- (3) 古の 七の賢しき 人どもも 欲りせしものは 酒にしあ
るらし
- (4) 賢しきと 物いふよりは 酒飲みて 醉泣するし まさり
たるらし
- (5) 言はむ為便 せむ為便知らず 極まりて 貴きものは 酒
にしあるらし
- (6) なかなかに 人とあらずは 酒壺に 成りにてしかも 酒
に染みなむ
- (7) あな醜 賢しらをすと 酒飲まぬ 人をよく見ば 猿にか
も似る
- (8) 價無き 寶といふとも 一坏の 濁れる酒に あに益さめ
やも
- (9) 夜光る 玉といふとも 酒飲みて 情をやるに あに若か
めやも
- (10) 世の中の 遊びの道に すすしくは 醉泣するに あるべ
かるらし
- (11) 今の世にし 楽しくあらば 來む生には 蟲に鳥にも
われはなりなむ
- (12) 生者 つひにも死ぬる ものにあれば 今の世なる間は
楽しくをあらな
- (13) 默然をりて 賢しらするは 酒飲みて 醉泣するに なほ
若かずけり

大伴旅人作のこの連作は、その題材や内容に中国詩の影響が顯著

「万葉集」の中国語訳について（そのⅠ）

であるという点において、「万葉集」の中でも特徴のある作品となっている。元来、「酒徳頌」など中国詩には酒を詠んだものが多い。旅人は漢学の教養に秀でており、それらを土台としてこの十三首を作り上げた。その意味では、「抒情の頂点を摘み取って一篇の詩とする」²⁴⁾日本の詩歌より、観念的であると言えるだろう。小島憲之氏は、この連作について「歌の中ににじみ出た老荘的虚無的思想も、それは彼の心に深く根ざした『思想』と云ふよりは、その大半は外来書によって得た知識として受け取るべきであらう。」と分析する。しかし、同時に「この特異な歌の作られる契機としては、彼の嗜酒の癖、虚無的な考え方などいろいろあらう。酔泣も人間としての本性であり、一抹の感傷、淡い哀感が一聯の歌に漂ふ。」とも述べている。この歌を読むときには、観念的な人生感の底を流れるこうした哀しみを見過ごしてはならない。

ともあれ、この一連の作品には、漢語の翻訳と思われる表現が目立つ。例えば(1)(8)の歌にみられる「濁れる酒(濁酒)」(3)の「古の七の賢しき人ども(七賢人)」(8)の「價なき寶(無價寶珠)」(9)の「夜光る玉(夜光之璧、夜光珠)」(11)の「今の世(現世)・來む世(來世)」(12)の「生者つひにも死ぬる(涅槃經純陀品)」がそうである。また、(2)・(3)の歌はそれぞれ、魏の太祖が禁酒令を出したために、徐邈が白酒(濁酒)を賢者、清酒を聖人と呼んだという故事、放曠を理想とした竹林の七賢の故事に基いている。これらは、漢訳する際には極めて有利にはたらいだと思われる。

AとBの訳を比べてみてすぐに気が付くのは、A訳のまとめ方である。これは連作の共通点を意識したやり方で、十三首をまとめて一篇の詩として翻訳している。そして、各首の内容を、それぞれ十文字で過不足なく表現している。それに対し、B訳の方は、錢氏の

解釈の広がりを感じさせる。中国詩という面からとらえれば、A訳よりも完成に近いものということができる。

但し、原歌を忠実に伝えているかどうかということになると疑問が多い。例えば(1)の歌を取り上げて比較してみよう。原歌の大意は「かいのない物思いに沈むよりは、一杯の濁酒を飲んだ方が良いようだ」ということである。A訳はそれを「空しい愁いを抱えてどうなるというのか。(それよりは)とりあえず濁酒を一杯飲もう」という意味の語に置き換えた。内容的には近いと言える。B訳の方は「憂思は良に無益なものである。この憂さを忘れるにはどうすれば良いのか。(それは)濁酒を一杯飲むのが良いようである。」となる。「のむべく・あらし」を「似・宜・飲」と訳し、原歌に対する細かい配慮が感じられるが、どこか受ける印象が異っているのではないだろうか。

「價なき物と思はずは」かいのない物思いに沈むよりは「の鬱屈を憂思良無益」或いは「忘憂」に置き換えることはできない。錢氏の訳には、一種の思いきりのよさが感じられる。原歌の持つ、諦観の裏のやり切れなさといったものは、漂ってはいない。

もう一首、(3)についてもみておきたい。これは、先ほど述べたように、中国の故事に基いたものである。漢語の「七賢人」が、日本語では「七の賢しき人ども」と長くなるだけのことで、一首の意はA訳に尽きる。B訳の方は、「放曠」という、七賢人のとらわれない生き方を象徴する語を補い、更には「百無欲 百無蓋有一」と誇張した表現を用いて原歌の内容を強調した。面白い置き換えではあるが、原歌のよどみない調子が幾分失われているようである。

表意文字を使用する中国では、日本語三十一文字の世界を、十字で表現することが可能である。B訳の拡大は、錢氏の解釈、造語が随所にあらわれる結果となった。原歌にとらわれず、中国詩として

読むに面白い置き換えであるということが出来る。

思子等歌（卷五・八〇二、八〇三）

A 「日本詩歌選」による）

食瓜思吾兒。 食栗益相思。

之子何自來。 俾予徒無寐。

兒思……平声支韻

(反) 黄白金玉何所有。 多寶孰與多子伴。

B 「漢譯萬葉集選」による）

食瓜思吾兒。 食栗益相思。

其來何所自。 當我眼前癡。

徒使我念茲。 安眠靡有時。

兒思癡時……平声支韻

(反) 金銀與白玉。 於我何所有。

多子斯為寶。 多寶孰與伴。

C (原歌)

瓜食めば 子どもおもほゆ 栗食めば ましてしぬばゆ いづ

くより 來たりしものぞ まなかひに もとなかりて 安寝

しなさぬ

(反) 銀も 黄金も玉も 何せむに 優れる寶 子にしかめやも

これは、前述の同伴旅人と同時代の社会派歌人、山上憶良の有名な歌である。憶良はこの二首の序文に「釋迦如來、金口正説、等思衆生如羅睺羅。又説、愛無過子。至極大聖、尚有愛子之心。況乎世間蒼生、誰不愛子乎」と述べ、子を愛する人間の氣もちを訴えた。B訳では、その原文を紹介した上で「作者在官家屬留京也」と、作者の置かれた状況を説明している。

A訳とB訳とはよく似通っている。A訳の「俾」B訳の「靡」の

語は、古典に頻繁にあらわれる語で、「万葉集」の古さに対する配慮の一つであろう。また、B訳に出てくる「癡」は「痴」と同じで、物事に執着して捨て切れない状態を指す語である。そして、これは「貪」むさぼる「瞋」いかる」と共に、仏教の三悪業とされている。序文の内容「釈迦のような大聖でも子供を愛する」を踏まえた上で、ユーモラスな表現である。

両訳共に、「寶」と「子」を、それぞれ「多寶」「多子」と表現しているのも面白い。単に語調を整えるためだけではない、量的なものを強調するところに、日本人とは異った発想を感じる。

以上、「日本詩歌選」と「漢譯萬葉集選」に共通する訳歌の中の主なものを取り上げ、新旧両訳の比較、原歌との対比を試みってきた。原歌と訳歌との関係については、次項に詳しく述べることにして、ここでは新旧両訳についてまとめておきたい。

両訳は、共に原歌に訳者の解釈を加えたイメージ訳である。大意の把握のみでなく、韻文としてのイメージを伝達しようと腐心している点が共通している。その手段として、自国の韻文に置き換えているのだが、語句の配列や押韻の完成度などの点において「漢譯萬葉集選」の方が、より中国詩としての形を整えている。また、補促説明を付け、或いは原歌にない表現を加えることにより、原歌の雰囲気や伝えようとする点でも、後者の訳は一步進んでいる。「日本詩歌選」の試行を経て「漢譯萬葉集選」に至ったというところではないか。

註及び参考文献

- (1) 森淳司「外国文学の影響」『研究資料日本古典文学⑤万葉・歌謡』明治書院（1985）参照

「万葉集」の中国語訳について（そのⅠ）

- (2) 同右
- (3) 吉川幸次郎「中国文明と日本」『吉川幸次郎講演集』朝日選書（1974）
- (4) 近藤春雄「古典文學の支那譯」『現代支那の文學』京都印書館（1945）
- (5) 中村保男『名訳と誤訳』講談社現代新書（1989）参照
- (6) 錢稻孫『漢譯萬葉集選序』日本學術振興会（1959）
- (7) 外務省アジア局編『現代中國人名辭典』霞山会（1966）参照
日外アソシエーツ株式会社編『東洋人物レファレンス事典』（1984）参照
- (8) 近藤春雄『中国学芸大事典』大修館書店（1978）参照
- (9) 吉川幸次郎「錢稻孫氏『漢譯萬葉集選』跋」『漢譯萬葉集選』前掲
- (10) 目加田誠「錢稻孫先生のこと」『洛神の賦』（1966）参照
- (11) 同右参照
- (12) 高木市之助・五味智英・大野晋校注「萬葉集」『岩波古典文學大系』岩波書店（1969版）以下原歌は全て同書による
- (13) 西郷信綱『萬葉私記』未來社（1976）
- (14) 高木市之助 前掲書参照
- (15) 佐々木信綱『評釈萬葉集』佐佐木信綱全集 六興出版部
- (16) 竹尾利夫「安騎野の狼の歌」『萬葉集必携Ⅱ』学燈社（1981）
- (17) 諸橋轍次『大漢和辭典』大修館書店（1985版）参照
- (18) 藤堂明保『学研漢和大字典』学習研究社（1980版）参照
- (19) 鎌田正・米山寅太郎『漢語林』大修館書店（1987）参照
- (20) 尾形仇氏の東京教育大学での講義「日本文学」による（1976）
- (21) 木俣修『万葉集 時代と作品』NHKブックス（1988）
- (22) 高木市之助 前掲書
- (23) 斎藤茂吉『万葉秀歌 上』岩波新書（1971版）
- (24) 西郷信綱 前掲書
- (25) 鈴木修次氏の東京教育大学での講義「中国文学史」による（1976）
- (26) 小島憲之『上代日本文學と中國文學』塙書房（1988版）
- (27) 同右
- (28) 同右参照
- (29) 諸橋轍次 前掲書参照